

開発途上国の人々の暮らしと国際協力の現場を五感で知る —内戦の遺産と現代カンボジア社会—

担当教員名 武貞 稔彦／岡松 暁子

1 コースの概要

日 程	2014年8月24日～8月31日
場 所	カンボジア王国（プノンペン、シエムリアップ）
参加人数	25名

2 コースの目的

本コースの目的は、経済協力や援助の対象となっている開発途上国とよばれる国や地域の暮らしと人々について、五感を使って知ることです。今年度は典型的な途上国として想起されること多いカンボジアを訪問し、現地の現実とイメージの異同について考えます。とりわけ、内戦の遺産である多数の「地雷」が人々の生活を未だに脅かしている現状と、いわゆる「貧困」や「幸福」との関係について、異国人である日本人が理解／想像できる範囲という限界も意識しつつ考えることを目的とします。

3 事前学習

5月から8月にかけて6回（授業11回分）の事前学習を実施しました。貧困・格差・豊かさ、支援、歴史・内戦、世界遺産・自然、教育、地雷、という5つのグループに分かれ、それぞれカンボジアの歴史と現状や訪問先での学びに必要な情報を整理、共有するべく努めました。また日本とは環境が大きく異なる途上国に訪問するために、現地での滞在中に健康上注意すべきことなども確認しました。

4 行程

1日目

朝の飛行機で成田空港出発後、ホーチミン経由で夕刻にプノンペンに到着しました。

2日目

午前中は地雷除去を担当するカンボジア政府機関カンボジア地雷活動センター（CMAC）を訪問し、内戦の負の遺産である地雷についてのレクチャーを受け、実物の見学を行いました。午後は、プノンペン市内にあるツールスレン虐殺博物館を見学、その後、日本政府の支援で作られたカンボジア日本人材開発センター

をたずね、日本語を学ぶ現地の人たちと交流会を催しました。

3日目

午前中は国際協力機構（JICA）を通じて日本政府が支援し建設、運営されている浄水場を見学、午後にはJICAカンボジア事務所を訪問し、駐在する職員の方の講義を受けました。その後、NPO団体の日本地雷処理を支援する会（JMAS）から地雷除去活動に日本の民間団体が果たす役割や現地の人々の地雷に対する想いについてお話を伺いました。また夜には青年海外協力隊として現地で活動しておられる女性隊員の方たちから、現地での暮らしや支援について貴重なお話を伺いました。

4日目

プノンペン市内の王宮と寺院を視察後、キリングフィールドと呼ばれるポルポト時代の史跡を見学、内戦で犠牲となった人々に哀悼の意を捧げました。その後陸路約6時間をかけてシエムリアップに移動しました。

5日目

午前中はCMACが実際に地雷除去活動を行っている現場を視察、地雷の爆破処理に立ち会いました。午後は、日本人教員が活躍するトロンオンドーン小学校及びワットポー小学校を訪問し、先生や児童と交流を持ちました。

6日目

この日は終日アンコールの遺跡群をめぐり、歴史ある世界遺産を見学しました。夜は現地の伝統舞踊をみながら食事をとりました。

7日目

午前中は日本人女性が現地で起業したクルクメール工房というハーブ等を扱う工房を訪問、起業に至る経緯やカンボジアへの想いについてお話を伺いました。その後はトンレサップ湖で船上生活をする人々の集落を船で訪問しました。夕刻ホテルをチェックアウト、ハノイに向け空路出発しました。

8日

ハノイ経由成田空港に帰着し、朝、空港にて解散しました。

5 事後学習

事後学習は当初から予定されていた公開の事後報告会に向けた準備に主にあてられました。現地滞在中に

毎日書きためた気づいたことのカード（全部で1000枚を超えました）をシェアしつつ、事前学習で分かれたグループが現地視察を通じて知ったこと感じたことを報告としてまとめる作業を行いました。特に、「地雷」と「幸福」と「貧困」という三つのキーワードをどう結びつけられるのかということを中心にそれぞれ考察を深めました。学部生や外部の方も交えた事後報告会では、構成や発表などすべて学生自身が行い、あらためて現地視察を通じた学びの成果を確認するとともに、短い訪問期間では知り得なかったことなど、今後自らの学びに活かせる振り返りを行いました。

6 雑感

途上国への訪問では「学び」以外にも、集団行動をしながら健康を害さず事故なく帰ってくるという大事な目的があります。行程にも十分に配慮しましたが、参加学生がしっかり団結し協力してくれたおかげで、今回も無事に行程をこなすことができました。



カンボジア地雷除去現場に向けて歩く



カンボジア小学校交流会



カンボジア地雷除去現場でのレクチャー



カンボジア田園風景



カンボジア日本語学習者との交流会

学生の声

「カンボジアがくれた自分を見つめ直す機会」



2年 池田 葉留奈

私がカンボジアに行こうと思った理由は日本のかつての姿だと言われている途上国に行ってみたい、また本当にカンボジアとは貧しいのかを自分の目で見てみたかったからです。カンボジアは長い内戦の記憶が根強く残っているため、環境保全と社会開発を同時に行っていく難しさを強く感じました。また地雷除去が行われている地域にも訪れ、常に「死」と隣り合わせの生活を送っている人達がいる事に衝撃を受けました。今回カンボジアを訪れることで「私たちが行っているボランティア活動がカンボジアにとってどう機能しているのか」についても考える機会となり、援助依存が問題視されているカンボジアでは「援助」に対し何が1番必要であるかなどの見極めが大事であると思いました。当たり前だと思っていたことへの感謝の気持ちにも気付かされ、今生活している環境について深く考える機会ともなりました。新たな発見を求めにぜひ自分探しの旅へ出かけてみて下さい。